まなぶ
2024年5月号
No.815

♣ 扉　全国和解週間　小畑美史　1
♥ まなぶということ　飯島貞親　2
♠ 今月の統計資料　4
◆ 詩　ガザの坊や　緑川ふみ　8

特集　武力をもたない平和主義

危機に瀕したいまだからこそ輝く平和的生存権のリアリティ……斉藤小百合　10
軍事生産こそ「国益」にそぐわない……池内　了　14
パリ五輪を平和主義、国際協調再考の契機に……谷口源太郎　17
組合活動を通じて学んだ平和教育の意味……中村真也　20
沈黙する合衆国憲法の下で進行する危機……高橋和夫　22

日本のうしお　世界のうしお
どこに向かう武器輸出の規制緩和……今井高樹

食料・農業・農村基本法改定
農業と村がめちゃくちゃになりそう……大野和興　29
紅麹サプリ問題
健康被害の原因は経済優先の規制緩和……原　英二

職場の法律相談　ハラスメントとは？……五十嵐　潤　54

国家と教育 14　戦後教育改革と教育権の独立……宮澤孝子　57

誌上学習会『春闘2024』2　みんなで取り組む春闘……61

◆みんなで歌を　41
◆キャラバンサライ　42
◆スポーツ時評　44
◆メルボルン便り　46
◆経済を知ろう！　48
◆中國觀看　50
◆たちみ席　52
◆働く現場から　53
◆情報BOX　65
◆北から南から　66
◆センターとみなさんをつなぐ　68

カット＝野﨑安希子

まなぶということ

君が代とふるさとを考える

飯島　貞親

毎年、卒業式になると『君が代』を歌うことが強制される。そのねらいは、子どもたちに国家への服従を刷り込むことで、思想統制がされた戦前の軍国主義の復古であり天皇を賛美させることである。

そうした問題意識の中で、唱歌『ふるさと』が『君が代』に代わる国家にふさわしいとの声がある。ウサギが駆ける里山、コブナが泳ぐ川がある自然豊かな故郷を想い、父母や友人の無事を祈る心は尊い。

と、ここまでは頷（うなず）く人がほとんどだろう。ところが、である。

『内山節と読む世界と日本の古典50冊』（農山漁村文化協会）によると、この歌はふるさと捨てる歌であるという。気持ちはいつも故郷を想っており、最後に「いつの日か帰らん」とあるが、故郷に帰って暮らすわけではない。都市で成功し故郷に錦を飾る、つまり「立身出世しますよ」という歌だと説明している。

また、冒頭の「ウサギ追いしかの山」いう歌詞についても、日清戦争以降、日本は寒冷地での戦争に勝たなければならないという状況に追い込まれたが、木綿でできた当時の軍服は暖かくないものだった。そこで襟（えり）につける毛皮が大量に必要になり、学校でもウサギの追い込み猟をやることになったという。とったウサギを校舎の軒下にぶら下げ、生徒たちが誇らしげに写っている写真が各地に残されている。

ウサギを追いかけたのは、牧歌的な情景ではなく軍事産業からの要請だった。軍が狩猟者に鉄砲の撃ち方を指導した事実も残されている。

内山氏によれば、「ふるさと」を含む文部省唱歌は、明治期に入って国家のために生きる人間を育てるためのものだったという。そしてふるさとは、生まれ育った村で暮らす場所ではなく、想いを寄せるだけの場所になったとのこと。

（日本音楽協議会会員）